

平成 30 年秋期 金沢中部地区推進連絡会

1 日時

平成 30 年 10 月 24 日（水） 18:00～20:00

2 場所

いきいきセンター

3 参加者

（地域側）自治会等地域団体関係	31名
（支援チーム、その他行政側）	
区役所	11名
区社会福祉協議会、地域ケアプラザ	7名

4 意見交換要旨

「地域防災の現状、対策、取組について」4グループに分かれて意見交換・発表。各グループに均等に8町内会からの参加者を割り振った。

(1) 1グループ

- ・日頃から、近所同士で声をかけ合い、互いに顔つなぎをしておく。
- ・働き世代にも防災に関心を持つような周知方法や体制づくりを検討していく。
- ・避難時の安否確認方法について、地域全体が統一した方法がとれるよう（例えば、黄色のハンカチやタオルをドアにかけるなど）方法の統一化と周知の徹底が必要ではないか。
- ・地区の支援ボランティアの組織づくり（担当を1対1でつけるのではなく、1人の要援護者に対し1対2～3担当制をつけ、一人に負担や責任が行かぬような体制を作る）
- ・大雨情報発令時や災害時、不安の強い高齢者が地区を徘徊しないよう、高齢者の避難場や居場所の確保が必要（いっとき避難所等以外で）

(2) 2グループ

- ・道が細く車が入れない、一時避難場所の指揮者がいない(地域防災拠点手伝いと町の避難所の手伝いを分担していく必要がある)、水の災害についてはあまり話し合う機会がない、などが課題
- ・日頃の人間関係がものを言う。
- ・班長になることで意識が変わるのではないか。考えるきっかけとしてほしい。
- ・防災訓練を通して隣近所の家族の構成や年齢を聞く、知ることができた。
- ・普段繋がりを求めて外に出てくる人は助かる確率は上がってくると思う。出てこない人をどう普段から人と繋がるように促していくかを考えていかなければならない。

(3) 3グループ

- ・リヤカーなどを使って足の不自由な人を救助する練習など訓練に入れるとよい
- ・水害なのか地震なのか、災害時の避難場所を予め知り、どのくらいの距離なのかを知っておく。
- ・サロンによる交流や日常的な挨拶で交流や情報伝達ができる関係を築いておく
- ・大きな単位ではなく、班（10世帯）くらいの小さな単位で相互に安全確認ができるしくみづくり
- ・水害の心配のない地域でも、独居であったりすると不安になるので、独居の要援護者への電話などによる心のケアの対応。
- ・豪雨になってしまってからでは避難所に移動するのは困難なので自宅内の安全な場所にいるべき。
- ・年齢、世代によって情報の入手方法が異なる。得た情報を相互に共有する。
- ・災害の種類によって、避難場所も行動も変わってくる。また、平日に災害が起こるのか、休日におこるのかによっても、対応の仕方は大きく違う。様々な場面におけるシミュレーションが必要になってくる。
- ・平日に災害が起きた場合、若い世代は働きに出てしまっている。地域にいる中学生がとても力になってくれるはず、地域の防災訓練は中学校と一緒にやったほうがいい。
- ・訓練に参加しない人、参加できない人への伝達方法も考えなければいけない。

(4) 4グループ

- ・独居高齢者はある程度把握できているが、家族と同居していても昼間は一人になっている人についてはほとんどわからない。
- ・サロン等に顔を出している人はある程度把握できているが、そのような場に顔を出さない人が心配
- ・防災訓練で消火器を使用するが、使い方がわからない人や握力等がなく使用できない人が意外と多い。
- ・避難場所である八景小学校が低地にあるため、比較的高所にある城山公園に多くの人々が避難してくる可能性が高いが、城山公園に備蓄している食料等では対応できない。
- ・要援護者と支援者とのマッチングを行いたい。
- ・地区内のアンケートを行う予定
- ・日頃の顔が見える関係づくりが大切